

## 急性化膿性中耳炎に対する抗菌剤の 適正使用について（抄録）

宮本直哉<sup>1)</sup> 村上信五<sup>2)</sup> 渡辺暢浩<sup>2)</sup> 鈴木元彦<sup>2)</sup>  
小関晶嗣<sup>2)</sup> 鈴木由美子<sup>3)</sup> 小林寅<sup>4)</sup>

- 1 愛知県厚生農業協同組合連合会加茂病院耳鼻咽喉科
- 2 名古屋市立大学耳鼻咽喉科
- 3 山田エビデンスリサーチ
- 4 三菱化学ビーシーエル

耳鼻咽喉科領域ではペニシリン耐性（低感受性）肺炎球菌や $\beta$ -ラクタマーゼ非産生 ABPC 耐性菌（BLNAR）などの耐性菌による中耳炎の重症化，難治化が問題になっている。これらの耐性菌の増加に伴い，従来の Empiric Therapy が通用しない現状をふまえて，今後は地区あるいは施設における耐性菌の検出状況を把握し，最適な治療方針を立てることがますます重要になってくる。

我々は昨年の本研究会において，急性中耳炎患者の上咽頭ぬぐい液または中耳分泌物からの耐性菌の検出状況，および一般に汎用されている抗菌剤や CDC ガイドラインで推奨されている各種抗菌剤に対する感受性について検討した。その結果，初期治療においては CDTR や CFPN などのいわゆる経口ニューセフェムが，二次治療としては PAPM や CTRX などの注射剤が適切であると報告した。

今回は，上述の基礎的検討の結果に基づき，臨床的検討として急性化膿性中耳炎，特に難治症例に対する二次治療薬の有効性について検討を行ったので報告する。